

参考資料1

翻訳  
フェビー・インディラニ  
「天使の質問」

野中 葉 訳

まだ死ぬには若すぎると思ったが、サスマタは、安堵の気持ちだった。33 歳ではあるが、彼女は、すでに来世のための準備は出来ていた。サスマタは、20 歳のころから、つまり人生の半分以上の時間、イスラームの勉強会（ブンガジアン）に熱心に参加してきた。一般に、多くの人に信じられているところによれば、最後の審判の日には、誰もが現世での宗教の実践が十分ではなかったと後悔する。サスマタも、例外にはならないかもしれないが、でも、彼女は出来る限りのことをして、最後の審判の日も平穏でいられるよう努力してきた。

何より、サスマタが平穏でいられる理由は、アラビア語が上手だったことだ。何人ものクルアーン朗誦の先生たちに、アラビア語は来世の言葉だから、ちゃんと勉強するようと言われてきた。現世でも、アラビア語は宗教活動の際に、たとえば、ブンガジアンの仲間たちとの交流の時にも使われた。来世ではアラビア語だけしか使われないということも、サスマタには理解できていた。

094

だから、死ぬ時が来たのだということが分かった時、少なくとも、来世のためのとても重要な要素の一つ、つまり言語を習得しているから、サスマタは有難いと感じていた。

亡骸の埋葬が終わり、埋葬に立ち会う長い列の人たちがゆっくりと帰っていった後、サスマタは一秒一秒を数え始め、待ち、そして期待した。死者が墓に入れられ、埋葬してくれた人が墓を離れて 7 歩行くか行かないかのうちに、天使が死者に対し、重要な質問をし始めると言われている。サスマタは、すでに準備は出来ていた。町の本屋でベストセラーになっている『墓の世界での質問と返答の秘訣』という本も、すでに読んでいた。

印象では、7 歩というのは正しくなさそうだった。あるいはサスマタが時間を数え間違えていたのかもしれない。彼女はまだ、現世の時間と新しい世界の時間のあいだに漂っていて、宙ぶらりんのよう感じていた。でも、そのすぐ後、暗闇の中から咳払いする声が聞こえ、一對の何かがサスマタの前に姿を現したので、サスマタは時間のことも忘れ、これに注目した。

サスマタは、この二つのものの姿をドキドキしながら、でも注意深くチェックした。クルアーン朗誦の先生は、不信心者のもとに赴く時、天使ムンカルとナキールはとても恐ろしい姿をしていると言っていた。二人の歯は牙のようで大地を鋤き、彼らの髪の毛は大地を掃くのだと先生は言っていた。でも、サスマタの前にいるものは、普通のように見えた。少なくとも、彼らの口から牙のような歯は飛び出ていなかったのも、それは良い徴だった。

二つのうちの一つは、もう一つと比べて背が高かった。サスマタはこっそり、その背が高いほうをムンカルと、もう一つの方をナキールと名付けた。もしチャンスがあれば、後で、彼らに名前が正しいか確かめようと思った。

「Saha Pangeran maneh? (あなたは誰ですか?)」ムンカルは突然に話し始めた。

サスマタは啞然とした。彼は何を話しているのか?

「Saha Pangeran maneh? (あなたは誰ですか?)」ムンカルはもう一度聞いた。

「Teu ngartos (理解していないだろ)」、ナキールは言った。

サスマタは、まだ、啞然とし続けていた。

「ああ、なんでだよ。サスマタって名前なんだろ。なんでスダ語が分からないだよ」ムンカルは不機嫌になって文句を言った。

「Eweh Ranying Hattala Langit ikaw? (あなたの神は誰ですか?)」次は、ナキールの番だ。質問をぶつけてきた。

いったい何語なの? サスマタの心臓は滑り落ちそうだった。冷や汗が両手を濡らした。

「ダヤック語も分からないのかい? お前さんの父さんと母さんの言葉だろ」ムンカルは、落胆と侮りの入り混じった表情で、頭を左右に振った。

サスマタは喉を通らせるため咳をし、勇気を振り絞った。

「ごめんなさい。でも……、でも私は……アラビア語で答える準備は出来ています」

「はあ？」ムンカルとナキールは、お互いに顔を見合いながら、同時に叫んだ。そして、大きな声で笑った。ナキールは腹を抱えて転げまわって大笑いし、3分ほど話すことさえ出来なかった。ムンカルも、壁を叩いて、大笑いしていた。

「なんとまあ、この国だけでも 700 以上の言語があるのに！」

「サスマタという名前は、アラビア語を話すのかね」

「我々の神がアラブ人だとでも思ってるのかな？」

ムンカルとナキールは、お互いにそんなことを言い合いながら、大笑いし続け、ますます笑いを止めるのが難しくなっていた。

一方で、サスマタの顔は、蒼白かった。この状況は、本当に、想定外だった。だからと言ってどうすればいいのだろう。

「私を赦してください。ごめんなさい。お願いです……」。サスマタは、姿勢を正して座った。

ムンカルは、笑いを止めようとしていたし、ナキールは、まだ笑い転げていた。

「あんたは、ひどいよ！あんたの国で、100 以上の言語が絶滅の危機になるってこと、知らないんだろうね。知らないだろ？」ムンカルは迫って言った。

サスマタは、震えながら首を横に振った。

「そうだろうね、知らないだろうよ。地方語への注目はもちろんのこと、あんたの国の言葉ですら、あんたは使いたくないんだろ、違うか？」

サスマタは、うんうんと頷いた。

「もうどうすればいいんだろうね？こういう人間には、質問しても無駄だろうね」ナキールは、笑い転げるのをようやく止めて立ち上がり、言った。

「どうする？もう行くか？」ナキールはムンカルに尋ねた。

「続けてくださいお願いします……お願いします……」。サスマタは懇願した。

「賭けてもいいが、彼女は、次の質問に絶対答えられないぜ」。ム

ンカルは、両手を腰に当てて言った。

「まあまあ、やってみようじゃないか」

沈黙が訪れた。サスミタは、蒼ざめた顔つきで待った。

「よいだろう。では、あなたは、イワンが元気かどうか知っているか？」

「ええと……、イワンですか。誰かな？」

「では、テレジアさんは？」

「ええ……、テレジア、ですか？」

「ほら、言っただろ。もういい。全く絶望的だよ」

「これはどういうことですか？なぜ私は、おかしな質問ばかりされるのでしょうか？これまでに、現世で出来るだけ良い準備をしてきたんです。本当は、こんなはずじゃないんです」。サスミタは、この時とばかりに不満を爆発させた。

「我々からの最も大事な質問に、答えられるとでも言うのかね？」

「もちろんです！」

ムンカルは、ケツケツと笑った。「イワンというのは、あなたの家の家政婦さんの子供だよ。授業料が払えなくて、学校を退学しなければならなかった」

サスミタは、啞然とした。「アシさんの子供？でも、アシさんから、そんなこと、一度も聞いたことがありません」

「あんたこそ、気にかけて、彼女に聞いたことがあったのかな？」

そんなふうに逆に聞かれて、サスミタは、恥ずかしくなって目を伏せた。

「テレジアさんというのは、お前さんのご近所の女性だよ。重い病気で、結局亡くなった。お前さんは、彼女を助けたことがあったかね？お見舞いに行ったことは？お葬式には弔問したのかい？」

「テレジア……、でも……、でも名前から言うと、テレジアさんというのは、私とは宗教が違うみたいで……」、震える声で、サスミタはゆっくりと言った。

ナキールは頭を横に振った。「お前の言った通りだな。こいつは、

本当に見込みなしだ」。ナキールは手を横に振った。

「助けてください……お願いします……。私はこの時のために、現世の人生の半分以上の時間をかけて準備してきたのです。もう一度、お願いします。皆様のご配慮をお願いします」。サスマタは、二人の天使があのような大事な質問をしてくれるように、今度は、うなだれて、前かがみになり、全身でお願いした。

「いいだろう、そんなに言うならば……」

あなたの神は誰か？

あなたの預言者は誰か？

あなたの宗教は何か？

あなたの兄弟は誰か？

サスマタの口は開いたが、声が出なかった。

冷や汗がサスマタの身体を流れた。質問には、一つも答えることが出来なかった。